wander land

虎乃羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｗａｎｄｅｒ　ｌａｎｄ

【Ｎコード】
Ｎ４５０５Ｓ

【作者名】
虎乃羽

【あらすじ】

『戦の影に女あり、大国の影に悪魔あり』

戦場で出会ったフォースとレア。
戦争でフォースがレアの国を陥落させたのをきっかけに歯車は廻り始める。
すったもんだの後に婚姻を結ぶことになるふたり…それは同時に悪魔との契約だった！！

戦いありの、恋愛ありの、そして悪魔が活躍？するお話しです。
世界統一めざして、若者たちが奔走します。

戦場の出会い

天空の橋ですべてを見定める歌人は歌う。

『戦の陰に女あり。大国の裏に悪魔あり。』

□■□■□■□■

長い戦乱の世だった。

国を束ねる者は皆、世界を統治せん為に、荒野を走り、大地を血で染め、

ひとつ、またひとつと国を滅ぼしていった。

たった一つの大陸。世界を手に入れるために。

そしてまたひとつの大地が地に還る。

□■□■□■□■

「遅い。」

大国のひとつ。『サファイア』の王子は苛立っていた。

数人の従者を従え、地にそのまま腰をおろして片手で頬杖をつき、攻め落としたこの国の城を見つめながら苛立ち、そして、思い出していた。

今までに自分が滅ぼした国々を。

滅ぼした国に残るのは、『不安』・『絶望』・『怒り』。そして『喜び』。
悪政に苦しんでいた国を滅ぼすと、民の瞳には『喜び』の光が宿る。
だが、今回は『喜び』は姿を見せなかった。
城下を少し歩いたが『喜び』のカケラも落ちていない。
この国の王は、賢王だった。そのせいだ。

「後味が悪いな。」

溜息混じりに呟く。そこにひとりの兵士が現れた。

「殿下！王家の方々を見つけました！…が…」

片膝をつき頭をたれて報告する兵士は途中で言葉を止め、心を落ち着けるためか2、3度深く呼吸をする。
俯いていた王子は、顔を上げ兵士を見た。
この国の王を拘束する為に、何十人の兵士を送ったが、いまだ任務完了の報告はない。
あまつの果てに、まだ何かあるようだ。

「…なんだ。」

機嫌も悪くなって当たり前だった。

「あっあの…邪魔者がおり…おりまして…」

機嫌の悪い王子の声にびくびくする兵士。
報告が仕事とはいえ、言わなければよかったと後悔している様だ。
冷や汗も止まらない。

「邪魔者？……そいつのせいか…。」

少し間をおき、王子は立ち上がった。
身に着けた鎧と剣が僅かに音を立てる。王子に続き従者たちも立ち上がる。

「行かれますか」

従者のひとりが尋ねた。王子はすぐに答えなかった。
城下の町を見渡す。倒壊した家屋、炎も見える。
荒らされた商店。かすかに聞こえる子供の泣き声。そして漂う血の匂い。
目を閉じれば、賢王に統治され、平穏だったこの町が見えてくるような気がする。
しかし、目前に広がるは・・・惨劇のあと。

「滅ぼす他に道はないのか。どうすれば…。」

「殿下？」

小声で呟いた王子に、従者のひとりが思わず聞き返した。
しかし王子は答えず溜息で返事をした。

「何でもない。出るぞ。」

そして真意を見せぬまま、家来を連れてその場を後にした。

□■□■□■□■

「父上たちに近づかないで！！」

多くの兵士たちに追い詰められたこの国の王。後ろは激流の川だ。
勇むひとりの少女。剣を持つその手は僅かに震えている。
一国の王である父と母、そして幼い弟王子を守りたい。と一生懸命だが、やはり恐ろしいことに限りはないのだ。

やってきたサファイアの王子は呆然とするしかなかった。
サファイアの兵士はたかが小娘ごときに手をこまねいていたのだから…。
兵士たちは王子が来たことに気付かず、王たちを追い詰める。
苛立った少女は闇雲に剣を振る。それが見事にひとりの兵士の服を掠った。

「おのれっ！」

兵士が剣を少女に向けた瞬間、王子が大声で怒鳴った。

「やめろバカ者！！お前たち…いい加減にしないかっ！！」

その声にサファイアの兵士たちは一瞬にして硬直する。
そもそも王子が大声を出すのは珍しいのだ。

「もういいから…さがれ。」

溜息混じりで王子は言う。少女に手を上げるなど恥じだ。……情けない。
情けなさすぎてかける言葉に困る。

徐々に後退する兵の間を歩き、王を見た。
王にしては若い年にみえるが、賢王と伺える賢そうな面持ちをしている。
そう思うのは自分の父が中年すぎで、愚か者にしか見えないからだろうか。
そして彼の王は穏やかな目で自分を見ていた。

「…私たちをいかがなさるおつもりですか？」

「まだ考え中です。…ですが、王家の方々に無礼を働いたことはお詫びします。」

この王は自分を試している。王子はそう思った。
自分が人を束ねられる人材か、従うべき人か。見極めている。
少しの間、ふたりの時が止まっていた。

「だめだ。負けましたよ王子。あなたに従いましょう。」

「……は？」

「煮るなり焼くなり好きにしてください。」

少し軽率ともとれる王の判断に、先ほどまで持っていた賢王のイメージが危うくなる。
だがどうやら王から見た自分は従うべき人だったようだ。と王子は確信した。

「父上！！私はこんな奴に従いたくありません！！」

しかし、それを認めない者が声を荒げた。

先ほどの勇ましい少女だ。

「ちょっとまて。父だと？」

頭に手をあて、聞き返す。
王子は兵士に追い詰められていたときの彼女の言葉は聞いていない。
…ただの女戦士だと思っていたのだ。

「王子、これは娘のレアです。お見知りおきを。」

「紹介してる場合ではありませんってば！父上！！平気で人の国を滅ぼすような男なんかに…。私は嫌です。」

のんびり娘を紹介する王にしっかり突っ込みを入れて、少女―レアは苦々しく吐き捨てた。
その言われように、ムッとした王子が反論する。

「平気なものか。好きでこんな事やってるはずないだろう。父上の命令だから仕方なくやっているだけだ。」

“こんな奴”とか“平気で国を滅ぼす”とか言われ、平常心を保てるわけがない。
しかし、苛立ちを含んだ王子のその言葉はレアに更にはっぱをかけてしまった。

「では何故それを言わないのですか。自分の意見も言えない様な男に従えるわけないでしょう！！」

「やめなさいレア。王子は私たちのような小さな国の王子ではない。大国には大国なりの決まりがあるのだ。理解しなさい。」

父にそう言われ黙るレア。だが反省の色は見えない。
レアのなかの『男性像』というものに反するのだろう。
王子は黙っていたが…とうとう爆発した。…してしまった。

「…ふざけんなよ（怒）」

「殿下！？」

不穏な空気に事の成り行きを見守っていた従者たちに緊張が走る。

「悪いがお前には敬語は使わねぇ。“平気で国を滅ぼすような男”とか言ってくれたが、俺の部下を傷つけたお前は何様だぁ！？」

「あわ…あわわわわ…（汗）だ、誰か！殿下をお止めしろおぉぉ！！」

怒りを顕わに悪態をつく王子に従者たちは異様に焦り始める。
しかし彼を止める術もなく、さらには口論の相手・レアをとめることもできないまま、

「女相手に恥もなく怒る、アンタよりまし様よ！！」

レアの反論の言葉にたまりかねた王子が剣に手をあてる事態になってしまった。
王子の動きを見て身を縮こませるレアの横に王子は立ち、激流の川に向かって剣を振り下ろした。

ドゴォォォォン！！！！！

轟音と供に、川の向こう岸までものすごい地割れができた。
王家の者はあっけにとられ、王子の従者たちは泣きそうな顔をしていた。
王子の細い身体のどこにそんな力があるか……。
とにかく、王子は剣を振ったところでスッキリした。……らしい。

「生憎。俺は男女平等主義でな。？か弱い女を大事にしろ？……なんてくそくらいだ！真っ二つにされなかっただけましと思え。じゃじゃ馬女！」

王子はレアにそう吐き捨て、王たちに背を向け、歩き出した。

「じゃ…じゃじゃ馬？な…なんですってぇ～！？ちょっと待ちなさいよっ！！こぉの！！ボンクラ王子ぃ――――――！！！！」

それを聞いた王子は転びかけたが、なんとか耐えげんなりしながら呟いた。

「ボンクラはないだろ…」

「殿下……（汗）ど、どうか落ち着いてください。」

「あの女の名前……プレミア（希少価値）から取ってんだったら名前様々だな。」

心配する従者たちをよそに、皮肉交じりに言ってみたものの案外正解のような気がしてさらにげんなりする王子だった。
そして、その王子の後ろ姿を見てレアの父が呟いた。

「落ち着きなさいレア。噂通りの人だな。フォース殿下…」

「フォース（力）？あの王子の名前ですか？」

「あぁ。王者としての力を全て持った完全無欠の王子フォース。名前様々だね。」

「そんな、どこがっ……ボンクラ王子で十分です。」

長い戦乱の世での出会いだった。

———運命の出会いだった。

大国の影　1

女はか弱い。
そんな事はこの大陸、世界では通用しない。
女戦士の人数も多い。王と共に戦う王妃も多い。

大国の王妃の条件。それは強いことである。

□■□■□■□■

フォースがレアの国「フローライト」に来て2日たったある日のこと。
息を切らして一人のサファイア兵士がフォースの執務室としている部屋へやって来た。

「殿下！！」

「なんだ騒々しい。」

あからさまに嫌そうに返事をするフォース。昼食後の満腹感に浸っている所だったのだ。

「大変！大変です！陛下がお見えです！！」

「なんだと！？…くそっ！またか！！！」

陛下―つまりフォースの父であるサファイア国王だ。

今と比べ小国だった「サファイア」を継いで、たったの3年で近隣諸国を滅ぼし併合せしめ、大国を築いた男だ。
そんな栄華を極めた頃とはうって変わって、現在は息子のフォースに戦をさせ、滅ぼした国全てから王家の姫を嫁がせ、ハーレムを築く中年の男…ただのおっさんに成り下がっていた。
フォースが忌々しく「またか」と言ったのにはこういったわけがある。
例にもれず今回も王家の姫を見繕いにきたのだ。
食後のコーヒーが来るのを待たずして、フォースは急ぎ部屋を後にした。

□■□■□■□■

「お前がこの国の王だった者か。」

「はい。お会いできて光栄です。サファイア王」

そう言ってレアの父―フローライト王はお辞儀をする。そして隣にいるレアも一緒に頭を下げた。
形式ばった挨拶だが、礼儀を重んじるレアの父に対し、そんなふたりを見るサファイア王の瞳は、完全に見下した瞳だった。

「私がここに来たのは他でもない。王家の姫を一人差し出せ。」

顔をあげたフローライト王に、これまた見下した様にサファイア王は言う。

「差し出せぬなら王子が何と言おうとこの国を焼く。」

フォースは戦はするが、国土もろとも滅ぼすことはしなかった。
形式上は「滅ぼして」いたが、それはその国をサファイアの属国にするといった処置だ。
それを覆すような、サファイア王の発言。
無言でレアが一歩前に出た。

「レア・・・」

「ここを焼かれたくはありません。どうか行かせてください。……それに姫は私しかいないわ。父上。」

「レア…何を言って…」

レアは心配する父に背を向けサファイア王を見た。
今までの言動すべて、許せなかった。こんな王より、ボンクラ王子の方がマシだ。とも思った。
視線の先には顎鬚に手をあて、品定めをするように自分をみてくる中年オヤジ…もといサファイア王。その容姿はフォースとは似ていなかった。遺伝子の神秘かそれともにじみ出る性格のせいなのか。

「レアと言うのか。4、5年したらいい女になるだろう。」

品定めを終えたのかそう言いつつレアの顔に手を伸ばすサファイア王。
それを（超絶に）拒否しようと、レアは言った。

「フォース王子とは似てらっしゃらないのですね。」

「あいつは母親似でな。」

止めた手を再びサファイア王が動かした時、

「レア！！」

レアの名を呼ぶフォースが響いた。ハッとして動きをとめるくらいの大きな声に驚いたレアだが、
それよりも名前で呼ばれたことへの驚きもあった。
サファイア王とレアの許へたどりついたフォースはサファイア王の手を防ぐように、ふたりの間に身体をいれる。

「今いる側室の方々ではご不満なのですか？父上。」

「王子よ…無粋なことを申すな。はべらす女子（おなご）の数が多いは力ある者の証ぞ。」

「（そんなこと聞いたことねぇよ。）…ですがレアには手を出さないでいただきたい。昨晩、私は彼女と結婚の約束をいたしましたので。」

フォースの言葉にレアの父からフォースの従者、皆が驚いた。
レアに至っては固まってしまっている。
昨日の晩といえば間違えてフォースがレアの部屋に入り、深夜にも拘わらず、大声で喧嘩をしていた。
という出来事があったのだ。
つまりは、結婚など嘘の発言なわけだが、サファイア王はそんな事など微塵のカケラも知る訳がないので……

「な、に？…珍しいではないかフォース！お前の方から女子（おなご）に手をつけるとは。」

見当違いに喜んだ。

「えぇ。まぁ。」

発言の低レベルさにあきれ、かける言葉もないフォース。

「やはりお前も、わしの子。血は争えんな。」

息子の心中など知る由もなく王は嫌味まじりにそう言いのける。
気分を害すサファイア王の言葉にフォースは言葉を出さないでいた。
今は我慢しなければ、どんな罵声を浴びせてしまうか分からない。
うっすらと笑みを携え耐えるフォース。

「王妃も喜ぼう。戻り次第、急ぎ婚儀の仕度を整えねば！」

満足気にそう言ってサファイア王は馬車にのり帰っていた。
砂煙をあげて走り去る馬車の姿がみえなくなると、携えていた笑みを一気に崩し、

「てめぇと一緒にすんな！！エロジジイがっ！」

我慢していた罵声も一気に吐き出した。
忌々しい気持ちを吐き出すようにふーっと息をついたところで、

「こぉんの！ボンクラの上にバカ乗っけた王子！！」

「何だそら。」

響き渡ったレアの怒号。あまりのいわれように、思わずつっこんで

しまった。

「何でアンタなんかと結婚しなきゃならないのよ！」

怒る怒る。レアは大声でフォースに怒鳴なりちらす。
怒りで我を忘れている様子のレアに、正攻法ではなだめられないと思ったのかフォースは

「俺じゃ不服か？」

とすけこました発言をしてみたものの、効果はもちろん逆に働いた。

「ちっがーーーーうっ！！！」

更に響き渡るレアの怒号。
結婚という女の性を持つ者にとって一大事のことを、たったの数秒単位で決められたのだ。
しかも自分の国を滅ぼした男で、なおかつ自分が男して認められない男にだ。
さらに怒鳴ってやろうとした所、フォースが溜息混じりに話だした。

「まったく…世間知らずの血統書付のじゃじゃ馬だな。お前は。」

「何よそれ！」

言い訳かと思いきや、小バカにしたその言い草にすかさず突っ込むレア。
しかしフォースは同じトーンで続けた。

「王の後宮に入ると、もう一生外へは行けないし、王以外の男に

は会えない。それに他の側室たちにいびられる。陰湿だぞ、あそこは。」

フォースの言葉を聞くたびにレアの顔は暗く、引きつっていった。小国育ちのレアにとって、大国の後宮は未知であり、恐怖の世界に聞こえたのだ。

自由奔放に動き回っていたレアには信じられなかった。

「まっ、助かったと思えよ。あのエロジジィより俺の方が幾分かはマシだ思うぞ。」

「自分で言わないでよ！それに…マシとかそんな問題じゃないわ…助かる訳ないのよ…」

下を向いたままレアは言った。震える声を絞り出す。

「なんだと？助かる…」

「助かる訳ないじゃない！」

フォースが何か言いかけると、レアは顔を上げ、その言葉に被せるようにフォースに言った。

「助けたつもりなら私たちの国を返して！！今までの生活を返して！！…貴方に国を滅ぼされた…その時から私はもう助からない！」

泣きかけた瞳で叫ぶようにフォースに言葉を投げつけてレアはその場から走り去った。

「んだよ…。助からない訳ないって？そんなことあるかよ。生き

てんだから…」

レアの言葉が重くのしかかったのか、それを否定するフォースの言葉に力はなかった。

大国の影　2

それから2日たった日の夜。明日は『サファイア』の王都へ帰る日だ。
あの事件以来、フォースとレアは口を利かなかった。
すれ違いの毎日だった。
そんな二人を心配してかフォースの許に4、5人の従者がやってきた。

「殿下。お願いでございます。」

「イヤダ」

「まだ何も言っておりません。」

従者達はこう言うと、一斉に土下座をした。

「！！？」

「お願いです！レア殿となにとぞ…なにとぞ仲直りなさって下さい！！」

「あのなぁ…（汗）」

頭に手をあて、困る…というか情けなくなるフォース。
幾度戦いを重ねてきた強者が女の為に（多分家来達はフォースの為）頭を下げているのだ。
情けなさすぎるが……嬉しく思った。

「…あ～もう…わかった！なんとかする！」

「殿下！？」

顔を見合わせ、喜び合う家来達。大きい老犬が嬉しがっているようだった。

なるべくそっちを見ないよう、フォースは苦笑いをした。

そして…面白半分で家来達に言った。

「ただし！俺が本気かどうか当てたらな。」

家来達は一瞬にして石化した。…一人を除いて。

その男はやって来た従者の中ではもちろん、きっとこの国へやってきた兵士の中でも一番の老兵だろうと思われる。

「恐れ多くも殿下。貴方様は本気でいらっしゃいます。いずれ「サファイア」の王となられる御方。大国の王妃の条件を満たしすぎているレア殿を放っておくわけありません。」

フォースはそれを聞くと、笑みをこぼしながら歩き出した。

そして部屋を出る際に老兵の方は見ずにこう言うのだ。

「満たしすぎている・・・か。確かにそうだよな。」

大国の王妃の条件―それは強いこと。

その強さの解釈は人それぞれだが、レアにはその強さを感じさせるものがあるのだ。

老兵が感じたレアの強さは、祖国の誇りを捨てず毅然と振舞う姿からだろう。

だが、フォースは違った。

レアのように真っ向から自分にぶつかってくる女など、フォースは出会ったことがなかった。
王都にいる時は黙っていても周りに姫や貴族の娘が集まっている程の強がつく女運の持ち主のフォース。
集まる彼女達の口から出されるのは、偽りの言葉。恋敵への嫌味。くだらないものばかりだった。
レアのような女性はいなかったのだ。あんなに真っ直ぐに自分とぶつかる…否、向きあう者は。
つまり、レアはフォースにとって、新世界そのものだったのだ。
そしてその未知なる彼女に一言で言い表せない強さを感じた。
部屋を出たフォースは徐に城の中を歩き出す。窓の外はやけに明るい星達が大地を照らしている。

「腹をくくれよ。今から俺だけの光を手に入れに行くんだからな。」

と、意気込みをつけたもののレアの居所がさっぱり分からず、城中を歩き回る羽目になったのだった。

契約　1

「お前が必要だ」
この世界での常用の口説き文句。
けれどいくら強いといっても女は女。
それだけで納得しない女の人もいる。……彼女達の欲する言葉は何だろう。
そしてここにも悩める男が一人。

□■□■□■

「み…見づげだ…（疲）」

フローライト城内を2周くらいした（実際には何度も行ったり来たりをくり返していた）後、
ようやくレアを見つけたフォース。
城の中腹にある外へ少しせり出した広めのバルコニーのベンチにレアはいた。

「なにしてんだ？」

「！？」

いきなり声を掛けられ、身体をびくつかせ驚くレア。
けれどただそれだけだった。
声で誰かは分かったのだろう。何も言わず、フォースの顔も見ようとしない。

完全無視の対応だがともかく話そうと隣にフォースが座ると、レアは反するように立ち上って去ろうとした。

「待てよ。」

立ち上がったレアの腕を反射的に掴むフォース。
レアは無理に振りほどくことはしなかったが、言わずさらにフォースを見ないレア。
流石にフォースもムッとする。ゆっくりとベンチから立ち上がり掴んだレアの腕を少しひっぱり注意を向けさせようとしてもレアは振り向かない。

「……こっち向けよ、じゃじゃ馬。」

この状況ではあまり使いたくなかった呼び名でレアを呼ぶと、条件反射的にレアは振り向いた。
その瞬間に今度は力任せにレアの腕を引き、レアを引き寄せるフォース。

「っ！！」

フォースの（バカ）力に逆らうことなど到底無理というもので…レアはフォースの胸に飛び込む形となっと。
引き寄せた腕と反対の腕がその場からレアを逃がさないように背に回ったのをレアは感じると、顔を上げてフォースを睨みつける。
やっと顔を向けたレアに内心ほっとしたフォース。
しかしレアはその後、何も言わずすぐに視線を逸らし身を捩って逃げ出そうとした。
意地でも口をきかない気のレアに苛立ちを覚え、彼女の腕を掴む手に力を加え更に引き寄せ、背中に回したもう片方の腕にも力を入れ

る。

「何するのよボンクラ王子！…とかって言わないのか？」

「――――…手を離して。痛いわ。」

耳元の近くで囁かれたフォースの言葉に、ギリッと歯をくいしばった後にようやく話したレア。
今までと違う、静かな声だった。

「話をしてくれたらな。」

と言いつつもレアが話した直後から手の力を緩めていたフォースは小さく頷いたレアを見ると、掴んでいた腕を離し、背中に回していた腕も下ろした。
フォースの拘束が解かれると掴まれていた腕に手を当て撫でながら俯くレア。

「悪い。少し力入れすぎたか？」

その様子に心配してフォースが少しかがむとレアは急に顔を上げて思い切りフォースに向かって体当たりをしてきた。
あまりの不意打ちにフォースは態勢を崩し、レアもろとも後ろに倒れこんだ。

ドサッ

完全に倒れこんだフォースは上体を起こそうとしたが目の前に映った刃の光に動きを止めた。
ともに倒れたというよりもフォースを押し倒したレアが馬乗りにな

り、フォースの喉元の上でナイフを突き立てていた。

「……じゃじゃ馬め…俺を殺すか？」

「殺してやりたいっ……でも、そしたら今度こそこの国はっ！！どうしたら、どうしたらいいのよっ！私にはもう何も残ってない…何もできないっ！！」

声を詰まらせながら話すレアの目から涙が溢れる。その雫が落ちて自分の頬に触れるのを感じるとレアの悲痛な叫びが心に染み込んでいくようでフォースは思わずレアの頬に手を伸ばし流れる涙を拭った。

「ちょ、触らないで！」

急に感じた感触にレアはハッとして身体を少し起こす。その隙にフォースはレアが持っていたナイフを奪い上げた。「あっ」と小さく声を上げるレアを見つめたまま上体を起こすフォース。近くなったフォースとの距離にまたもや目を背けるレアに、フォースは大きく息を吐いて話し出した。

「俺と一緒に来いよ。ここにいても、サファイアの統治に文句も言えず憤りを感じるだけの毎日だろう。お前にそんなの似合わない。」

「父上達を置いていけない…」

「俺が王になるまで待て。俺が王になったら今まで滅ぼした国は開放するつもりだ…色々協力はしてもらうけど。」

「ホント？嘘じゃない？」

「そう思うなら隣に立って俺を見張ってればいい。バカなことしてたらいつもみたいに罵ればいい。――なぁレア。何も残ってない、何も出来ないなんて言うなよ。生きてる限り、人はゼロにはならない。」

フォースの言葉にまた涙を流すレア。
そんな姿にまた思わず手が動いているのをフォースは感じると、先ほど「触るな」と言われたことを思い出し、その手でグッと握り拳を作り動きを止めた。
目に手をあてがい涙を拭うレアを見てフォースは少し笑みを浮かべた。

「レア、俺と一緒に行こう。一緒に世界を見に行こう。」

レアは深く頷いた。涙を拭いフォースを真正面から見据える。

「行くわ。あなたの傍にいるのがこの国の為に、私のためになるなら。」

「そうだな。」

二人はここから歩み始めた。

――――　一緒に　――――

契約　2

真っ青な空だった。
天も二人を祝しているような日だった。
その裏で闇の誓約が交わされる事など知らず……
人も、天も二人を祝した。

そう…今日はフォースとレアの結婚式の日だ。

■□■□■□

「サファイア」の王都は連日大賑わいだった。
皇太子（王位を継ぐ王子）が勝利の凱旋するとともに、結婚が発表されからだ。
民に優しい皇太子を心から祝福し、妃殿下となる姫を歓迎する日が続いた。
そんな中、事の重大さに気付かない二人の戦士。
以前にフォースが滅ぼした国のひとつ、「アメジスト」で起こった反乱を収めに行き、帰ってきたところだ。
名前はジンとデイジー。二人ともフォースに従う有能な戦士だ。
特にデイジーは「サファイア」で最強とされる女戦士である。

「…フォースが帰って来たからこの騒ぎか？それとも俺か！？」

「はいはい（溜息）まぁフォースが帰ってきてこんなに騒ぐ？普通？」

「うーん」と首を傾げる二人。
この二人は小さな頃からフォースの傍にいたのでフォースを“殿下

”と呼ばない。
フォースもそれを嫌がるのだ。
悩みながら城へ向かう二人。
歩く町はものすごい活気だ。酒場では朝から男達が酔い潰れ、市場や商店では半額セールなどが行われている。
ジンとデイジーが魚屋を通り過ぎて、暫くすると…

「さぁ！今日は特別にこのマダラはいつもの半額だぁー！！早い者勝ちだぞー！！」

「「買った！！」」

魚屋の声に引き戻された。魚好きのこの二人。見逃す訳はなかった。

「まいど！！」

マダラを袋に入れる魚屋は上機嫌だ。

「活きのいいのが揃ってるな！」

「タイとかタチウオとかはないの？」

真剣な瞳で魚屋に言い寄る。魚屋は二人に袋を渡し、残念そうに言った。

「いやー。残念だがその2匹は城のコックが持ってっちまったんだ。ほら、今日はフォース殿下の結婚式だろ？なんでも、魚好きの従者のためだとかって言ってたけどなぁ。」

魚屋の話を聞き、落ち込んでいた二人だが最後の言葉に目をパチク

リさせた。

「え？……誰が？」

「結婚するって？」

恐る恐る聞き返す二人。

魚のことなどもう忘れ、魚屋の話に耳を傾ける。

「フォース殿下さ。なんだいあんたら知らないのか。」

「「嘘だーーーーーっ！！」」

□■□■□■

王城。

町とは違って常に厳かな気品溢れる空気がいつもなら漂うのだが、今日は埃が漂った。

夕方から行われるフォースの結婚式の準備に大忙しなのだ。

急に決まった婚儀だったが短期間で準備できてしまうあたり、王城に勤めるものは有能だな。と感心して歩くフォースは衣装の最終チェックに向かう途中である。

急ぎ足の他の人とは違い、その歩調はゆっくりだった。

ドドドドドドドド

知っているような地鳴りがして、ふと、あの二人に連絡はちゃんと届いたのだろうか。と思った。

受けた報告ではそろそろこちらに戻る頃だ。もしかしたら行き違い

になっているかもしれない。
そう考えているうちに地鳴りがどんどん近づき、声が聞こえてきた。

「「フォーーーーーーース！！！」」

地鳴りと声の主はジンとデイジーの二人だ。
魚屋から猛ダッシュでここまでやって来たと思われる二人はフォースの目の前でギリギリ止まると、一息ついてことの詳細を尋ねてきた。

「結婚するってホント！？」

「あぁ。…それより「アメジスト」の方は…」

「楽勝、必勝、優勝…てか！あぁって何だ！？あぁって！？俺たち聞いてないっつの！」

結婚についてうまくかわしたつもりが、長年の感覚からかスルーされることはなくジンは突っかかってきた。
やはり彼らにだした知らせは行き違いかなにかで届いてなかったようだ。
そのことを説明すると不本意ながらも納得したのか落ち着いたふたり。

「それで？お相手はどなた？」

「「フローライト」の姫。」

「「フローライト」…それって私たちが「アメジスト」に言ってる間にフォースが侵攻した国よね、確か。」

「んん？そりゃ陛下の側室になるのと間違いじゃないのか？」
デイジーの質問に淡々と答えたフォースはジンの言葉に薄く笑みを作った。
「奪った。」
思いがけない彼の言葉に少し驚きつつも、「おぉ！」と表情を明るくする二人。
「へぇー…やる時はやるのねフォースったら。」
「すっげぇ興味出てきたそのお姫さん！どんな方なんだ！？」
ジンがそう言うと、フォースは一気に暗くなった。聞いて欲しくなかったのだ。
だからフォースは嫌々小声で言った。
「……世間知らずの血統書付きじゃじゃ馬。」
「「は？」」
三人の時が止まった。
二人はフォースは王妃にしても問題なく、彼の後を3歩下がって黙って着いてくるような従順な相手を選ぶと思っていたのだ。
想像と現実のギャップに三人が固まっていると、何処からか少女の声が聞こえてきた。
…レアだ。

「フォース？フォース！？」

「この声の主か？」

フォースは歩き出しながら無言で背定。

「すでに呼び捨てだけど・・・どこがじゃじゃ馬？」

デイジーの問いかけに「うーん」と説明の言葉を見つけられないでいると、

レアの大きな声が響き渡った。

「フォースー！？……（怒）早く来なさいよこのボンクラ王子ぃーーーー！！！」

その声が聞こえるやいなやジンとデイジーがずっこける。

こんな城の中でフォースをボンクラと呼んだことに対して驚きと衝撃を隠せない。

「…スッゲェ姫さん…おもしれー！」

「…確かに……予想とは逆だけど、フォースらしいと言えばらしい子なのかも。」

「そんじょそこらの王子とは違うからなフォースは！」

「何とでも言え……くそっ」

二人の嬉しくもないフォローに苦々しく吐き捨てるフォースであった。

■□■□■□

数時間後。
純白のドレスに包まれたレアは、大勢の招待客を二つに割るよう設けられた道をゆっくりと歩いている。
道の先には正装をしたフォースがレアを見つめている。
招待客達の痛々しい視線が自分に注がれている中フォースのそのまなざしはレアの心にしみた。
大勢の招待客の中に、レアの親族に当たる者の姿はなかった。
しかし、レアは心細いとは思わなかった。
それはきっと、フォースがレアをちゃんと見つめていたから。
誓いの言葉を交わし、サインをするフォース。
それに習い、レアも同じ事をした。だがペンを握った時。
何か変な気を感じ、その手を止めた。

「レア？」

止まったレアの動きを不信に思って小声でフォースが囁くと、その声にレアは我に返り、一度フォースを見て……サインをした。
それを確認した「サファイア」王は招待客に高らかに告げる。

「我が息子とその妻に光あらんことを！！」

湧き上がる招待客。そのざわめきを聞いてか、町も騒ぎ始めた。
王族も、民も、兵士も…喜び王子を祝した。
だが、一人微笑みを浮かべる者がいた。王妃である。

「……契約は受理された。」

意味深に呟き、城内に戻り自室へ入る。部屋に設けられた大きな鏡によりかかり再び呟いた。

「レア姫のはどんな子かしらね。」

もたれた鏡に映っていたのは王妃の後ろ姿ではなかく、王妃とは別の姿。
尖った耳に頭から生える2本の細長い角をもつ長身の青年。
王妃を見つめるその瞳は悪魔が持つ瞳—縦縞の獣眼だった。

その頃。フォースとレアは、魚料理に貪りつくジンとデイジーを見て呆れていた。
何も知らず笑っていた。
悪魔と契約を交わしたことなど知る由もなく……。

つかの間の休息　1

結婚式から1週間がたっていた。
甘い新婚生活などほど遠く、フォースは政務に忙しく、レアはサファイア王家のなんたるかをみっちりと仕込まれていた。
レアも王族であるためその王家のなんたるかを学ぶ必要性は分かっているが、如何せん城内に押し込められる状況にはいささかストレスが溜まっているようだ。
そんなある日の朝。フォースはサファイア王に、レアは王妃に呼び出された。

■□■□■□

「デイジー…王妃様とどうやって話せばいいの？」
「いつも通りのレアでいいのよ。ほらっ！」
不安げな表情を浮かべるレアをデイジーは勢いよくベランダに押し出された。
そのすぐ傍には王妃がいる。……城下を見ている。
ベランダから見える「サファイア」の地は、大陸の東に位置し、海の近くにある。
この世界一、空と海が澄み、二つの青に守られた青の国だ。
「賑やかでいい町ですね。」
「そうね。好きになりました？」

「はい…と言っても実際に城下に下りたわけではないのですが…」
正直な気持ちを言ってしまいハッとするレアだったが、王妃は咎めもせずに微笑み、続けて言った。
「では、フォースの事は？」
「は？」
王妃からの思いがけない質問に言葉を取り繕えなかったレア。しかしすぐさま自分のしでかしたことを悟ると青ざめて無駄に瞬きをして空いた口が塞がらないほど動揺していた。
しかし王妃は先ほどと同様に咎めもせずに微笑むとまた続けた。
「出会ってから2日…でしたね、プロポーズは。馴染めないのはわかっているわ。…でも、どうしてフォースに付いて来たの？」
「それは……」
「貴女は何故此処にいるの？」
畳み掛けるような王妃の質問にレアはようやく開いた口を閉じ、王妃から視線を外しうつむいた。
王妃の質問にはある程度の答えはある。
けれど…その答えは口には出せない。
口に出すのが恐い。その答えが王妃の感に障ったりして自分の故国が焼かれでもしたら…。
そんな恐怖にレアは負けている。
滅ぼされた国の為に自分は何をすべきか。その答えを見つける為…

…。
そう言えばいいのに、でもそれは本当の答えか…？
レアは思った。何をすれば…ではなくて、何をしたいかを考えないといけない事に。
王妃様の問いかけに私はどう答えたいのか…
私は何故フォースと来たのかしら…。
レアの顔は真剣な表情に変わっていた。確かに変わっている。
迷いの色が消えた。
王妃もそれに気付き、何やら満足気に笑みを作っている。
そしてレアは言った。

「フォースは、私の知っている王子の中でも変わっています。…いい意味で」

「えぇ。やけに頭のキレる子だわ」

「強いし、賢いし、人望もあって他の王子と比べると大分変です」

レアの言う通り、他の国から見ればフォースは王子らしくないのである。
大陸に存在する国の王と王子は殆どうつけ者なのである。
権力を盾に、己の好き放題、やりたい放題なのだ。
もちろんそうでない国もある。レアの国などがよい例だ。
どちらかと言えば王の方がマシなのだが「サファイア」では逆。
フォースは権力を持っているからと言って、驕り高ぶらない。――
そこからして変である。
今はまだ、己がどうしたいか悩んではいるものの、心が決まればきっとフォースは世界を、大陸を一つにするだろう。
元来の頭のよさ。人望を用いて、いずれ世界を統一するような男だ。

「あんな変な王子につり合うのは、そんじょそこらのお姫様では役不足です。だから私が…そんじょそこらのお姫様とは違う私が一緒に来たんです。彼の行く末を見るために。それが私の願いに繋がるから。」

自信に満ちた顔だった。王妃も少し呆れている。……と言うか驚いている。

「……貴女ならフォースにつり合うと。思っているのね」

「…。不本意ですけど。フォース曰く私は世間知らずの血統書付きじゃじゃ馬ですから。変人はきっと変人に惹かれるんだと思います。」

「ふふっ。可笑しな娘…。そうだわ。これを貴女に渡そうと思っていたの。」

王妃が差し出したのは水色…セロリアンブルーの色をした宝石がはめ込まれている指輪だった。

見れば王妃も似たようなものをしている。宝石の色は深い青……ディープブルーだが…。

王妃は手に出した指輪をレアの右の薬指にはめた。ピッタリだった。

「サファイアの代々の王妃は青い宝石を身に付ける習慣があるんですの。ペンダントでも何でもいいのだけれど…」

王妃はそう言いながら己の指輪に触れた。

「指輪は使い勝手がいいでしょう？受け取って頂けますか？」

「もちろんです！光栄だわ。ありがとうございます！」
レアは指輪を嬉しそうに眺めながらベランダを出た。
王妃はそれを見送って、一息ついて呟いた。
「ディープ。出てきて」
すると指輪の宝石が光り、耳が尖がり、２つの角が生えている青年が現われた。
鏡に映っていた悪魔である。
「どう？あの娘は？」
「強い精神力を持っておられる。十分でしょう。あの方が契約を交わした悪魔が十二分に動くには。」
「そう。私たちを脅かす存在になってくれるのかしらね。あの娘についた子とは知り合い？」
「えぇ。一番弟子です。ですがあの方次第でしょう。我々、人と契約を交わす人界魔が動くには契約者の心の持ちようが鍵ですから……。」
そう言って、ディープは消えた。正確には指輪に戻った。
代々の王妃が身に付ける宝石は、契約を交わした悪魔の家なのである。
大国王妃の条件―それは強いこと。その強き意志をもって契約を交わした悪魔を使役するためだ。
この大国王妃の条件は世界共通。
つまり、他の大国。もしくは他の中小国でも、悪魔…人界魔と契約

を交わしていることになる。

「あの子の願いは叶うのかしら・・・ね。」

つかの間の休息　2

「また遠征か～。新婚だろうが関係ないのはあんまりだよなぁ？」
早々にサファイア王との謁見を済ませ、私室に戻る途中でジンがつぶやいた。
フォースと共に王と謁見した彼はいささか不満げだ。
新婚のフォースを気遣ってではなく、意味のない遠征に不信感が募る一方なのだ。
ジンのつぶやきにフォースは何も答えず歩き続けた。
そんなフォースが少し心配になり半歩歩みを早め、フォースの顔を覗き込むジン。
覗き込んだフォースの表情は不満げで且つ不機嫌。

「なんだ。けっこう怒ってんじゃん。そらそうだよな～新妻に構いたくて仕方ないのに仕事仕事でさらには遠征っていやがらせかよって…フォース？」
それを見て安心したのか手を頭の後ろで組みながらさらにつぶやくジンだったが、急に隣にいたはずのフォースの姿がみえなくなったので立ち止まり振り返る。

「それが言えたら問題ないんだがな。」
ため息まじりに暗くつぶやくフォース。
「しまった地雷踏んだ！」と確信したジンはのんきに組んでいた手を解き何かしらフォローしようとフォースに歩み寄るが、

「俺の気持ちを代弁してくれてありがとよ、ジン。」

「ええ！？俺に対してお怒りでっ！？」

思ってもみない怒りを含んだ笑みを向けられ歩みを止め固まった。
そのまま何も言えずにいると、フォースの背後に助け舟となる人物の姿が見えた。

「おっ！デイジー！あぁレアァ！！」

王妃との会談を終えたレアとデイジーのふたりだ。
逃げるように二人のもとへ駆け出すジンにフォースは軽くため息をつくと自らも二人のもとへと踵を返した。

「なに？またフォースを怒らせたのジン？」

「別に怒ってない。」

デイジーの問いかけにジンが答える前にフォースが反論する。
フォースの言葉に困惑の視線を向けるジン。腕はたつが少し単純である彼だが不快感が起こるわけではない。
加え幼少のころからの側近。怒ることなどないのだ。

「少し茶化しただけだ。ジン、馬の用意をしてくれるか？遠乗りに行こう。」

「お？おぉいいな！気分転換ってやつだな！」

「あら、いい案ねフォース！それなら厨房から何か拝借してこようかしら。もちろんレアも行くでしょ？」

「え！……あ、うん。そ、そうね。」

遠乗りの提案をしたフォースに意気揚揚と答えるジンとデイジーだったか、レアは一瞬戸惑いを見せたがすぐに頷いた。
その様子に不思議そうにきょとんとする3人。

「なんだ…もっと喜ぶかと思ったんだけどな。毎朝窓の外見てため息ついてるからてっきり外出たいのかと思ってたぞ。」

「あれは！そういう意味じゃない…ことも、ないけど…。」

フォースに自分の思いがばれていて少し恥ずかしいレアの語尾は徐々に小さくなっていった。
その様子にフォースは少し口角をあげて微笑んだ。

「あらあらお熱いですこと。」

「馬の準備準備〜っと。」

そんなふたりの様子をみてデイジーとジンは茶化し交じりの言葉を残してその場を後にした。

□■□■□■□

ジンとデイジーが姿を消した後、フォースに連れられて城門近くまでやってきたレア。
大きな城門を見上げて眺めていると、ジンとデイジーがが馬を引いてやってきた。

デイジーが引いている馬には小さなバスケットが乗っている。おそらく厨房で拝借してきた食べ物が入っているのだろう。フォースに馬を渡したジンが中を覗こうとするのを叩いて諌めるデイジーにレアは笑みをこぼした。

「よっ…と。」

隣で小さく掛け声をかけて馬に軽々と乗るフォース。
レアは馬を連れてきていなかったので、流れ的に彼の馬に乗ることになるだろう。
外に出られるのだ。百歩譲って相乗りはいいことにするが、レアにはまだ問題があった。

「ほら。来いよ。」

案の定差し出されたフォースの手。
だがレアはその手をすぐには取らなかった。何かを言いかけたがすぐに口をつぐんでうつむくレア。
フォースは単に相乗りを嫌がっているのだと思い、小さくため息をつく。
デイジーの荷物をこちらに移すか…とデイジーに声をかけようとすると、レアが意を決した瞳で見上げてきた。

「お……落とさないで、よ。」

「は？」

「昔…落馬して、それ以来、馬には乗ってないの。」

レアはそう言うと恥ずかしそうにフォースから目を逸らした。

そう、レアは馬に乗れないのだ。だがしかし、城から外出できるこのチャンスを逃したくはなかったのだ。
フォースはレアの発言に少し驚いたものの、どこか納得した様子でレアの手を取り、自分の前へと乗せた。
力持ちのフォースにはレアを持ち上げるなど、片手で朝飯前である。

「その馬も、お前と同じじゃじゃ馬だったんじゃねぇのか？」

「なんですって！？」

「あー…冗談だ。この馬は「サファイア」いちの駿馬だ。目、瞑ってる間に着くから大丈夫だよ。」

馬をゆっくり進ませながらフォースは言った。
そう聞いたものの、まだ恐いので（少し不本意に）フォースにしがみ付いた。
その様子からフォースはレアが本気で恐がっていると察し、前に乗っているレアの腰に片手を回した。

「フォース。この手は何。」

「落ちてもいいのか？」

「嫌。」

「じゃぁ大人しくしてろ。」

城門が音を立てて開きだす。
門の向こうには堀の上にかけられた橋があり、その先に城下の町が広がっている。

「町をゆっくり見るのはまた今度。」とレアの後ろでフォースが囁くと馬がゆっくりと動き出した。
城門をくぐり橋を渡るうちに徐々にスピードを上げて、後は町を駆け抜ける。
町を抜けきる頃にはジンも、デイジーも、徐々に離されていった。
スピードが上がる度、レアはフォースに強くしがみ付いた。

「レア！顔上げろ！風が気持ちいぞ！！」

フォースがそう言うと、レアは恐る恐る顔を上げた。
フォースの言う通り、風はとても気持ちよかった。緑の匂いがした。
城に吹く風はいつも潮の香りがしていたが、内陸へ向かっているので、緑の香りが漂ってきているのだ。
遠くには城と、城下の町が見える。

「……。国王がああでも町は廃れない…。いい町の証拠だ」

小声で呟いたフォース。髪をなびかせて優しいまなざしで町を思う彼に少し鼓動が高鳴ったのを打ち消すようにレアは頭を振った。
そしてまた走り出し、森の中へと馬を進めていく。
すると、森の中に湖が現われた。城下の町とはちがう澄んだ空気。
落ち着いた雰囲気の場所だった。
ジンとデイジーはまだ到着していない。
フォースは寝転んでんーっと伸びをしている。

「こういう落ち着いた場所は嫌いか？」

「…ううん。「フローライト」は内陸だから、思い出して…安心する。」

「そうか。また連れてきてやるよ。……って言ってもしばらくは無理だけどな。」

フォースのその言葉にまた戦が始まる。のだと直観的に察したレアは少し暗い表情を落とす。
今度はどの国が大地へ還るのか。

「私も行く。」

「言うと思った。もとよりそのつもりだ。」

レアの返事が分かっていたのかフォースは淡々と答える。
レアは自分の気持ちを見透かされて嫌な気もしたが、自分の申し出が拒否されなかったことを思えば憤りを感じることはなかった。
仰向けに寝転んでいるフォースの隣にレアもゆっくり腰を下ろした。

「膝枕でもいかが？とか言ってみたらどうだ？じゃじゃ馬。」

隣に座ったレアを見上げてからかい交じりに言うフォース。
そんなフォースに初め声を上げ反論するそぶりを見せたレアだったが、なんとかその怒りを抑え込む。
そして無理やり作ったであろう満面の笑みをフォースに向けた。

「えーいいですわよ膝枕！私はあなたの妻ですものねぇ～。」

怒りを抑えるためか少し裏返った声でそういうと、ポンポンとドレス軽く払う。
そしてそこに両手を「さぁどうぞ」の形でかざして、また作った笑顔をフォースに向ける。
その笑顔の裏に隠れた怒りのオーラが見えるようで、自分からけし

かけたことを後悔したフォースだった。

「（そこに行ったら食いちぎられそうだな、オイ…でもま、）せっかくだしな。」

とつぶやいて（正確には言い聞かせて）上体を起こすと片腕を支えにレアの方へと上体を動かす。
必然的に二人の顔が近づいたその状態でフォースは動きを止めた。
急に至近距離で動きを止められ思わずドキリとするレア。
しばらく口をパクパクさせた後、ようやく言葉を紡いだ。

「な、なに!?どうしたの…!」

そう言ったところでフォースの人差し指がレアの口に触れた。そしてやけに真剣な表情を浮かべるフォース。
茶化しているのではない。これは危機が迫っていることを無言で示しているのだとレアはようやく気付いた。

つかの間の休息　2（後書き）

メロリン要素をちょい足しました。
次回ようやくメインキャストのもう一人が登場です。

悪魔の目覚め　1

世界は悪魔に犯されている。

世界にある国の半分は人界魔と契約を交わしている。

その人界魔がこの世界にやって来たのは戦乱が始まって間もなくであった。

しかし、それを知るのは世界のほんの一握りの者だけである。

□■□■□■

「フォース…。ピンチ？」

「ちょっと多いか…」

異変を感じ取ったレアが小声でフォースに声をかける。

怖くなる程の静けさにいくつもの視線が潜んでいることはレアにも感じ取れた。

フォースは特段焦るそぶりも見せないが余裕でもない返事をレアに返した。

（しばらくすればジンとデイジーが来る。それまでやり過ごせるかは…五分五分ってとこか？）

フォースはゆっくりと立ち上がり腰につけていた剣に手を当てながらそう考えていると、同じく立ち上がったレアが自分の服を掴んでいることに気が付いた。

じゃじゃ馬などと呼んではいるが、戦場で見せた気丈な振る舞いは相当追いつめられてのもの。
彼女は女で、一国の姫として育てられたのだ。誰かに保護を求める動作は思わずに現れること。
今それが自分に向けられているのかとフォースは悟ると、たとえそれが「思わず」であっても少しうれしく思い、男のプライドをかけて彼女を守ろうと思った。

「レア、俺から離れるなよ。」

フォースは剣を抜き構えながらレアを自分の後ろにやる。
レアは小刻みに頭を揺らして頷くと、素早くフォースの背後に回った。その際に無意識に彼の服を掴んでいたことに気付くと自身も驚いたようにパッとその手を放していた。

「隠れてないで出て来い。相手になってやる！」

フォースが威勢よく声を上げると、木の影に潜んでいた数人の男が姿を現した。
身なりは汚らしく実に品のない面立ちから彼らが野盗であるのは一目瞭然だ。
彼らはフォースとレアが王子とその妃であることなど思いもせず、身なりの良い貴族の若い恋人同士としか思っていないだろう。彼らの顔に敬意も畏れも見られないのだ。
そのままジリジリとフォースたちとの間合いを詰めていき、そのうちの一人が一歩踏み出したのを合図に次々と襲い掛かってきた。
剣の腕はジンやデイジーと鍛錬を積んでいたため覚えがあるフォースは休む間もなくやって来る野盗達を逃すことなく切り付けていく。
しかし数が多い。
一人一人を相手にしていたフォースは次第にレアとの距離が遠くな

っていることに気付かなかった。
「離れるな」と言われたものの常に背後に控えていては戦いの邪魔になるのは分かっていたレアはあえて彼の後方に控えていたのだ。しかしレアのとった行動は、野盗たちの読み通りだったのか、フォースと離されたレアはあれよ、あれよという間に野盗に捕まった。

「はぁなしてっ！」

バタバタと抗うレア。だが力の強い野盗達からは逃げられる筈がない。

「レア！！」

それに気付いたフォースが後ろを振り返る。
だが、フォースが振り返るのを待っていたかのように一人の野盗が剣を振りかざしていた。

「フォース！！危なーーーい！！」

レアが叫ぶと、王妃から貰った指輪の宝石がセロリアンブルーの光を放った。
間一髪のところで、後ろにいた野盗に応戦できたフォースは、その野盗を蹴り飛ばすと再び振り返りレアの方を見るが、セロリアンブルーの光が眩しくてレアの姿を確認するることはできない。
一種の目くらましになったその光がフォースと野盗たちの動きを止める。そして次第に光が薄れると、人の姿が見えた。

「放せって言ってんだろうがっ！このゴミクズ共！！！」

「「え…。」」

いくらなんでもレアはここまで口は悪くはない。そう思ってのフォースの絶句と、
貴族の娘（だと勘違いしている）がまさかこのような言葉を言い放つわけない。と思っての野盗たちの絶句が重なった。
見えてきた姿はレアではない。大きなコウモリの羽と、ディープと同じ尖った耳を持った少年だった。
その少年は近くにいた野盗を豪快に殴り飛ばしていく。呆気にとられていた野盗たちに防ぐすべはなく次々に地へと伏していった。

「けっ。人界魔ってのは案外楽だなぁオイ。…ん？」

地に付した野盗たちに冷ややかな視線を送りながらつぶやいた少年はフォースの方を見ると、怪訝そうに目を細め言った。

「おいコラ。そこの王子さんから離れないと吹っ飛ばすぞテメェ。」

向けられた視線の先はフォースではなく、呆気にとられていた野盗の一人だった。
その野盗は一度怯んだが、無謀にも手にしていた刀剣構え直し戦意を少年に向け、フォースから離れようとはしなかった。
向けられた戦意などどうでもよいのか、少年はそれを見て呆れた表情で言った。

「離れろっつたんだ。この俺の好意は受け取れねぇってか？」

ここで少年は言葉を切り、勝ち誇ったような笑みを作る。

「じゃ、消えろ。」

ヒュッ　…　ドフッ！

風が吹いたと思ったら野盗は吹き飛ばされ木に打ちつけられた。
一瞬の出来事だった。
大きなコウモリの羽を持った少年はパンパンと両腕を叩いて辺りをキョロキョロと見ている。
不可解なこの状況にフォースはただ茫然とし、立ち尽くすだけだった。

悪魔の目覚め　2

人間と契約を結ぶ悪魔―人界魔。
その力を持って、契約者の伴侶を守るゆえに、
悪魔達の住む世界―地界である程度力の強い者だけが人界魔になれる。
しかしながら、性格上問題のある者がが多い。
いわいる人界魔は問題児かエリート悪魔。そのどちらかである。

□■□■□■

「「フォース！」」
ようやくやってきたジンとデイジーが異変を感じ取り、フォースの名を呼ぶ。
その声に少し安心したのか、茫然としていたフォースの顔に動きが戻る。
「二人の邪魔をしないようにのんびり走ってたら、何かやばそうな雰囲気感じて急いで来たんだ！…そんで…」
「でも無事みたいね。よかったわ。…うん…それで、」

「「あれ誰？」」

ジンとデイジーが勢いよく馬から降りるとフォースのもとに駆け寄り安堵の表情を見せる。
そして少しの間をおいて、ふたりは声を揃え、少年を指した。
しかし、フォースも返答に困るため、

「助けて…くれた。」

としか返せなかった。ジンとデイジーも完膚なきまでに地に沈んでいる野盗たちを眺めることで、その言葉が嘘ではないことを実感する。そして、少なくとも少年―なぜか大きなコウモリの羽をもっているがーは敵ではないだろうという答えに達した。

「ねぇ。レアは？」

不可解ながらも安全な状況と判断したところでデイジーがレアの姿が見えないことに気が付く。
フォースの身は守られたが、レアがもしかして野盗に捕まったのではないかと不安がよぎった。

「安心しな。生きてるよ。」

デイジーの問いかけにはあの少年が答えた。三人の視線が少年へと向けられる。
少年が少し羽をはばたかせるとフワリとその身体が浮かぶ、そして三人の目の前まで移動し再び地に足を下ろした。

「はじめまして。俺の名前はセロリア。」

そしていきなり自己紹介を始める。羽を広げ、金色の縦縞の獣眼をフォース達に向ける。
まじかで少年―セロリアを見ると、彼が人ならざるものであることがよく分かった。

「種別は有翼悪魔。属性は特にナシ。敢えて言うのなら風かな～。で、新人の人界魔！若くて強い！！地界の期待の星！黒翼のセロリアとは俺のことだ！！よろしくな！！ボンクラ王子！」

セロリアはそう言って人懐っこく笑顔を見せるものの、フォース達3人は固まったままだ。
と言うか、どう反応していいのかまったく分からない上に、聞いたことがない単語が並んでいたのだ。
そんな3人の様子にセロリアは目をパチクリさせた。

「あのさ。もしかして何も知らねぇの？人界魔とかさ。」

「あぁ。初耳だ。…それよりレアは？」

「レア…この身体の、マスターの名前。…マスターはダイジョブ。まぁ俺の話聞いてよ。」

戸惑いつつもセロリアと会話をするフォース。
大丈夫ならば何故姿かが見えないのか。と言いたかったがとりあえずセロリアの話を聞くことにした。
その内容は人界魔についてだった。
人間と契約を結ぶ人界魔は契約者…マスターの身体に乗り移り、マスターの精神力を用いて戦うことや、セロリアはレアが結婚式の時にサインした時と同時にレアの人界魔になったことなどを放すと、フォースが疑問を口にした。

「何をする為？」

「アンタを守る為だよ。旦那。」

セロリアはニッと口元に笑みを浮かべる。先ほどと言いこうも笑顔を向けてくる彼に「悪魔がそれでいいのか」と言いたくなるフォースだったが、黙ってセロリアの説明を聞いた。
彼が言うには、大国「サファイア」の王族であるフォースを守り、そのフォースを手助けすることが契約の内容だというのだ。

「旦那がピンチの時には必ず助けるよ。」

「そら、どうも…レアの身体に影響はないのか？」

自信たっぷりに「助ける」というセロリアに戸惑いつつも礼を述べるフォースは、自分のことよりもレアのことを気遣った。
そんなフォースにセロリアはまた笑みを浮かべると“ない”ときっぱり答えた。
実質的には指輪の中にいるだけで、レアの身体を奪う気はさらさらないらしい。

「マスターが強くなれば身体に乗り移らずに俺を召喚できるようになる。ようはこのマスターの図太さかな？」

「図太さならレアは大丈夫だろう。だけどおま…セロリアが受けた傷はレアの傷になるんだろ？」

「乗り移ってる時はね。召喚しているときは大ダメージくらうと影響でるかな…ちょっとだけど。」

「俺を守ってくれるのはありがたい。けれどレアを死なせるようなことは許さないからな。」

「うん。それもちろん！俺だってマスターが死ぬと困るし。あ、マスターが俺になってる時の他の奴等の記憶は、マスターが元に戻る時消えるからご安心を～。」

最後の業務的な言葉を聞くとフォースはジンとデイジーだけは消さないで欲しいと頼んだ。
ジンとデイジーは自分達の良き理解者で、だから。と。セロリアはしょうがなく受け入れた。

「あと、これは地界の事情なんだけど…俺達人界魔が、この人間界を統一するのに貢献したら、魔王様から強い力が与えられるらしいんだ。」

セロリアはこう言ってフォースの手を握る。

「だから！世界を統一しようぜ！フォースの旦那！」

迷いもなく世界統一を持ちかけるセロリアにフォースは戸惑ったが、ジンとデイジーが真剣な目つきに変わっているのに気づく。言葉にはしないが二人にもそう思うことがあるのだろうか。
それにレアもこの場にいたら「そうするべきね」とでも言うのだろうか。
それに自分はどうだろうか。あながち無理だと思っていないし、思いたくもなかった。
道筋はまだ見えないが、目標に置くくらいならと、

「わかった。努力はする。」

フォースはそう答えた。
なんだか利用されているような気がしなくもないのだが…。
セロリアはフォースの色よい返事に満足げに笑みを浮かべる。

「よろしくな！…と、そろそろタイムアップか…マスターにはフォースの旦那！あんたから言っといて！」

「は？」

「じゃね。」

セロリアがそう言ったすぐ後、レアの身体はぐらりと後ろに揺れた。
焦ったフォースが間一髪で受け止め、レアの身体はフォースの腕に仰向けに抱えられた。
セロリアの気配はもうない。レアに戻ったようである。
野盗に捕まれていた腕が少し痣になっているくらいで目立った外傷はないことに安堵するフォース。

「たまに敵国で桁外れに強いやつがいるけど、あれって人界魔だったのね。納得だわ。」

「んなこと言ってる時かよデイジー。…フォース、レアに何て言うんだ？相当応えるんじゃないか？」

その問いかけに口を噤んだフォースは抱えているレアを見た。隠せはしないと思った。
そもそもセロリアが動くには彼女の力がいるのだと聞いたばかりだ。
ならばとるべき道は決まっている。フォースはそう決心するとレア

を抱え上げた。

「レアにはなんとか伝えよう。俺は先に戻る、二人はこいつら片して来てくれ。」

二人に野盗の後片付けを頼み、フォースはレアを抱いたままサファイアの王城へと馬を走らせた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4505s/

wander land

2011年7月20日02時54分発行